

戦地から帰った兵士たち

戦地からの復員

戦地で敗戦を迎えた兵士たちは、その後どのように復員してきたのだろうか。復員の経過が比較的わかる兵士の事例を、いくつか見てみよう。

千葉県出身で当時八幡町（現南区）在住の桐谷一は、二二歳だった一九四三（昭和一八）年九月に召集され、相模原の電信第一連隊に入隊、すぐに満州に派遣された。翌年六月末には臨時編成により、沖繩方面の守備隊に転属となり、那覇から徳之島を経て、宮古島で敗戦を迎え、戦後（日付不詳）復員、召集解除となった。

桐谷の場合は、戦後捕虜として収容されたという記録はない。沖繩方面や中国大陸などでは、部隊単位で武装解除を受けた上で、現地で待機させられたことが考えられる。しかし、南方で敗戦を迎えた多くの兵士は、長短はあっても労務作業につかされるなど収容所で捕虜生活を経た後に、復員している。なかには、武装したまま対ゲリラの守備につかされた場合もあった。

金子清（磯子区森町）は、戦後二〇年以上経って従軍経験を手記にまとめている（横浜市史資料室所蔵金子清家資料）。それによると、一九四四年六月、三四歳で召集され、同年末仏印に上陸、翌年五月には英領マレーへの進駐を命



ハルマヘラ島で戦友が描いた小野道正
小野道正家資料

じられ、クアラカンサー（現マレーシアペラ州）で敗戦を迎え、捕虜となった。しかし、金子らは英軍の命令でマレー共産軍に備えて発電所の警備につくため、中隊から分遣隊として派遣され、しばらく取り残されることになる。

一ヶ月以上警備の任に就いた後に武装解除を受け、一〇月に中隊と合流した。ところが、翌月には戦争残務整理作業のためタイピンに派遣され、そこで労務作業を行いながら復員を待つこととなる。金子の復員は遅れ、一九四七年五月ようやく復員が決まり、二六日シンガポールに集合の後六月五日セレーター軍港を出港、一八日に佐世保入港、二〇日上陸、二五日南風崎駅を出発、二七日一八時横浜駅に到着した。

この他、蘭領東インド方面（現インドネシア）に派遣され、現地で敗戦を迎え、捕虜となった兵士が何人かいる。一九四〇年に現役入営してそのまま北支に派遣された小野道正（南区高根町）は、甲府で第二一〇連隊に入隊した後、翌年には暗号兵として第三二師団本部に転属、一九四四年五月南方転用によ



ハルマヘラ島から小野道正が父鈴三に送った絵葉書
1944(昭和19)年9月20日
小野道正家資料

りハルマヘラ島に上陸、現地で敗戦を迎え、四六年六月に復員している。神奈川県議会議員を長く務めた伊藤博（神奈川県六角橋）も、一九四四年一月、三四歳で召集され、ハルマヘラ島に派遣された。間もなく転属によりセレーバス島に移り、そこで敗戦を迎え、四六年六月に復員を果たしている。

もう一人松永浩介は、一九四一年七月、三四歳のときに召集され、甲府連隊に入隊、いったん満州に派遣されるが、開戦にともない一月南方転用のためタイに向かう。その後、四二年六月にスマトラ島、翌年六月アンボン島、四四年セレーバス島、四五年三月ジャワ島と移動し、そこで敗戦を迎える。松永の場合は、四六年一月シンガポール南方のガラン島に移り、五月二十五日ガラン島を出発、六月三日に大竹港（広

島県）上陸、五日に六角橋の自宅に着している。

日本鋼管社員の出征と復員

ガラン島の隣にあるレンバン島には、捕虜となった日本軍兵士の大規模な収容所があり、森新太郎が収容されていた。森新太郎については、断片的に記していた日記と復員後の手記が残されているが、履歴や軍歴の詳細は不明である。復員後の日記の内容が興味深いので、少し詳しく紹介してみたい。以下、紹介する森の日記・手記等は、いづれも横浜の空襲と戦災関連資料で、森新太郎と妻玉江の日記が、『横浜の空襲と戦災2 市民生活編』（横浜市、一九七五年）に抄録されている。

森は日本鋼管鶴見造船所に勤める会社員で、一九四四年一月の日記に「三十八才の春を迎う」と書いているので、数え年とすると一九〇七（明治四〇）年生まれになる。当時は妻玉江（岸谷国民学校教員）と南区大岡町に住み、子どもはいなかった。四四年六月一三日に召集令状を受け取り、一日に東京の近衛歩兵第七連隊に入隊した。先の金子清と同じ日の召集で、同じ連隊に入隊している。金子の手記も参考にしながら、森のその後を追ってみたい。森が配属された部隊は不明だが、本人の手記および妻玉江の日記によると一〇月一二日に品川駅を出発し、「南海」に向かったという。金子はすでに八日に品川を出発していたが、森と金



近衛歩兵第7連隊軍旗拝受1周年記念式 同連隊は前年に編成された
1944(昭和19)年9月7日 金子清家資料

子は宇品港で同じ月山丸に乗船、一七日に出港している。
金子の手記によると、月山丸は一端門司に入港、輸送船一一隻で船団を組み、二二日に出港、二四日早朝濟州島沖で敵潜水艦の攻撃を受けた。月山丸は船尾に魚雷を受けたが沈没は免れ、救助船に曳航されていったん濟州島に逃れ、兵たちは上陸した。月山丸以外の船団は全滅だったらしい。月山丸でも二〇数名が戦死したというが、金子と森は無事であった。金子はその後一月に入ってから釜山を経て門司に戻り、新たに喜備津丸に乗船、一一隻の船団で再度出発するが、やはり敵潜水艦の攻撃で船団の半数以上を失いながら、台湾高雄を経て一二月一八日ようやく仏印に到着している。



森新太郎手記 復員直後に書き始めた
1946(昭和21)年5月27日
横浜の空襲と戦災関係資料

森の手記は、月山丸が攻撃を受けたところで中断されているが、妻玉江の日記によると、知人からの便りで、夫が一月七日時点で釜山にいることを知らされている(一九四五年一月六日)。ここまでは金子と同じ動きをしていたと推測される。その後の森について手記からわかるのは、敗戦後捕虜となり、レンバン島に収容されたことだけである。仏印・英領マレー・蘭領東インド、いずれかの戦地にいたと考えられる。
復員の経緯については、復員後再開した森の日記からあるていどわかる。森は、金子より一年早く一九四六年五月に復員している。一二日に名古屋港に到着し、翌一三日名古屋駅を出発、一四日八時に上大岡駅に着いている。一三日の日記には、「横浜の地図を見て、自宅はどうやら焼けぬらしい。」と書いている。他の復員兵士の手記によると、復員兵が上陸する港には、自宅や実家が焼け残っているかどうか事前に確認できるように、空襲被災地図が掲示されていたようだ。
たとえば、スマトラ島北部のアチェ

州ランサに駐屯していた助野健太郎は手記に、「昭和二年八月復員。久里浜の復員部には地図が掲示されており、赤く塗ったところは焼失箇所とのこと、長者町九丁目の自宅のあたりは全部被災地だった。あきらめて故郷へ帰ることにし、列車に乗ったところ、知りあいの理髪店主に会い「あのあたりはすっかり焼けましたよ。今はアメリカの飛行場です。」といわれ、ガツカリした。」と書いている(横浜の空襲と戦災関連資料)。
森の一二日の日記はさらに続く。「後十時三十分名古屋発。沿道の人達御苦労様の声々いつしか眼頭があつくなる。御苦労様は君達なのに。」と、内地の空襲被害に思いをはせている。そして、翌一四日には「八時上大岡下車。なつかしき道、胸が一杯となる。家族一同無事、家も無事、只々有難し、有難し。入浴、畳、蒲団、電灯、ラジオ、極楽浄土なり。」と、無事復員したことに感無量の様子であった。一方、その日は不在だったらしい妻とは翌日再会した。「夜、玉江東京より帰える。お互いに何から話してよいのか。」と、うれしさの反面、二年ぶりの再会にぎこちない様子がうかがえる。
復員兵が直面した戦後
復員後二日経った一六日には少し落ちていて、必要な手続きに向かう。「午前中、老松町の世話部に行き、復員届を呈出。」

市内の変化の激しさに警難す(原文のまま)。終戦後は、進駐軍と女の天下なり。南方帰えりの黒坊(日焼けし、かつ汚れたというほどの意味だろう)の復員軍人の身すほらしさよ。」と、市街を闊歩する米軍兵士に対して引け目と反感と、両方を感じたようだ。三日には、久し振りに妻玉江と映画を見に行くが、上映されていたアメリカ映画は「面白くなし。市内の散歩も亦不愉快なり。どうも進駐軍の連中には何となく引目を感じる」と、敗戦に対する複雑な心境をのぞかせている。
なお、森が手続きにいった世話部というのは地方世話部のこと、県ごとに軍の事務を引き継ぐ機関として設けられた。神奈川県の場合、老松町に軍の事務を担う横浜連隊区司令部があったので、そこにそのまま神奈川県の方世話部が置かれた。
森は、五月いっぱい休養のかたわら、手続きとあいさつ回りなどに費やした。一七日、篠原の伯父を訪れた際には、「市電の混雑さよ。買出し婦人の労苦思いやられる。」と記し、二三日の日記には「米の相場一升七十五円也位なり。已に遅配十五日以上、此の分では来月は百円になるだろう。」と、内地の現実、配給生活の困難さを実感している。
また、二一日には、「弘明寺にて闇市の食物を一通り試食す。最高の価格不味、不衛生、紳士の近よるべきものにあらず。武士は喰はねど高楊子。今

後近づくべからず。喰らうべからずなり。」と、闇市の実情に驚き、嫌悪感すら抱いたが、その後は度々弘明寺の闇市に通うことになる。翌々日、米の相場、遅配を嘆いたその日、「良雄と共に試食（弘明寺前にて）、たまにはよいだろうとは思いつつも習慣になる事を恐る。」と、言葉とは裏腹に早速弘明寺の闇市を再び訪れている。

さらに、三二日には「弘明寺にて蜜豆を食す。前の男の天井の中の白い飯が、まぶしい様に光る。米も有る所にはあるものなり。」と、闇市に出回る白飯に驚き、六月二日にも「弘明寺の闇市散歩」に行き、看板に誘われて汁粉を食べている。その後も、会社帰りなどに弘明寺の闇市をのぞくのが習慣となっていたようだ。七月二日には、会社の「昼休みに鶴見駅裏口のマーケットを散策したが、当局より断乎禁止せられた筈の野菜や鮮魚が、堂々と軒を並べてすばらしい闇値で売っているのには一驚した。」と、闇市の実情とその存在感を改めて実感している。

森は日本鋼管という大企業の社員で、復員後も会社に復帰することができたので、復員兵としては恵まれていた。ただし、二〇日に会社に顔を出した際には、「すっかり人が変わり、何となく心落ちつかず不安なり。」と、顔ぶれが変わってしまった職場の様子に戸惑いを見せている。二年間の従軍・捕虜生活からの社会復帰には、やはり時間がかかった。六月一日には、レンバン島か

ら自分が送った葉書二通、一月一九日付と二月一七日付を受け取り、「苦笑ものなり。」と、自嘲している。これもまた、無事復員できたからこそである。会社には六月三日の月曜日に復帰後初出勤したが、「欠配の折とは言え、会社内配給物のさわぎにて仕事どころでなし。あきれたものなりの感深し。」と、戦後の職場の現実に直面している。しかし、会社での配給は、家族の生活には大いに助けになった。一方、その日初出勤から戻るとその疲れからか微熱が出て、マラリアの再発を心配した。それから一ヶ月ばかり繰り返し微熱を出し、久々の出勤の疲れか、マラリアの再発かわからない状態が続いた。結局、本格的に再発で寝込むことはなかったが、従軍経験による心配事をしばらく引きずることになった。

家族の戦死・被災

森はこうして無事に復員したが、家族が皆無事だったわけではない。弟の英三郎が戦死していた。英三郎は、一九四二年中には入隊していたらしい。翌年正月に外出で実家に戻っているのが、内地にいたのだろう（一月三日森新太郎日記）。そして、戦地に行く前に、同年九月一二日、二八歳で結婚している。その日の日記に森は、「戦時下ではあり軍籍にあるので英三郎の結婚式（仮）を自宅にて挙行。簡素すぎるとどうも気分がびつたりとしないが、又やむを得ぬ事だ。」と記している。

森の日記によると、英三郎は翌四四年三月頃には戦地に向かい（三月一日）、四月一日にはサイパンにいるらしいと書いている。また、五月二三日には戦地の英三郎から一〇〇円が届いた。森はこの後召集され、代わって妻の玉江が夫と共に英三郎の身を案じて日々日記に書き綴っていく。

六月一六日には、前日の米軍サイパン上陸が内地にも伝えられ、玉江は「英三郎さんを案ず。」と書いている。その後の戦況に、「サイパン急迫す。」（七月五日）と心配を募らせ、「独居の夏江さんの姿を想って涙出づ。英三郎さんは、最早とみなみな思えど。」（七日）と、英三郎の妻を思い、英三郎の無事を折る気持ちをあえて記した。しかし、九日にはサイパンでの戦いは実質的に終わった。そして、翌四五年三月六日の日記によると、二月一三日付の英三郎の戦死公報が届いた。

戦地にいた森がいつ英三郎の死を知ったかは不明だが、復員後四六年五月二三日には仏壇を掃除して、「英三郎も住み心地が善いだろう。」と弟を悼み、七月八日には英三郎の三回忌を営んでいる。来会者二四人、森によれば「関根君外各方面の努力により好物資集り、時節柄口にしがたき馳走が出来、且つ参会者諸氏も充分満足して帰ったのを嬉しく感じた。」という。

無事復員した兵士も、このように家族が戦死、あるいは空襲の犠牲となっていた場合も多かった。先に紹介した

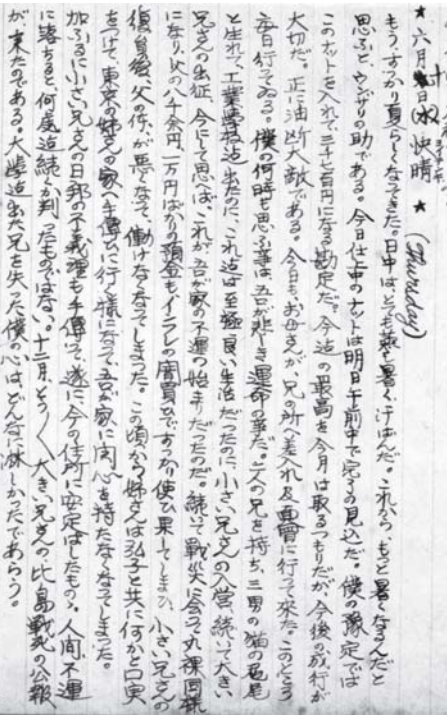
松永は、ガラン島の収容所にいる間に妻に宛てて葉書を送っている。「こちらは健在で復員の日をひたすらに待ち侘びている。」と知らせる一方、「そちらは無事で居るかという懸念で明けくれないっばいである。」と心配でならない様子だった（松永浩介『一兵士の戦中通信』オリジン出版センター、一九七八年）。しかし、復員してみると六角橋の自宅は無事だったが、浅間町の実家は五月二九日の空襲で焼失、父も火傷を負い亡くなっていた。

復員兵と家族の暮らし

このように、復員した兵士は様々に戦争を背負い、戦後を生きたのである。もちろん、兵士の家族自身も、それぞれに戦争を背負っていた。

中丸実（南区宮元町、女性）は「戦中戦後の衣、食、住」と題した手記で出征していた長男周二の復員について書いている（『横浜の空襲と戦災2 市民生活編』所収）。四六年初め頃、長男が復員してきたが、そのまま一ヶ月間寝込んでしまったというのである。相当消耗しての復員だったのだろう。

これに関連して、珍しい資料が残されている。「除隊（召集解除）者ノ件通報」という書類である。中丸周二上等兵は独立歩兵第四七大隊歩兵砲中隊に所属しており、通報には、大隊長名で南区長宛てに、四六年三月二二日除隊の上「帰郷セシメタ」と書かれていた。これに南区側が、三月二六日転入済と



兄出征以降を回想する小黒英夫日記の記述
1948(昭和23)年6月10日 小黒英夫家資料

後再び日記を書き始め、五〇年頃までの日記が残されている。日記には、出征していた二人の兄のことが度々書かれている。小黒英夫の日記は、横浜の空襲と戦災関連資料と複製があり、

『横浜の空襲と戦災2 市民生活編』に抄録されている。横浜市史料室では、改めて家族から原本の寄贈をうけたので、以下寄贈資料中の日記をもとに紹介する(小黒英夫家資料)。

上の兄は一九一四(大正三)年生まれ、一九四一年二月に結婚、一九四三年六月一日に召集され、東部第八八部隊というから相模原の電信部隊に通信兵として入隊しようだ。出征後の九月に女子が生まれている。四四年九月六日には戦地から便りが届き、フィリピンに居ることはわかっていった。一方、下の兄は一九二二年生まれ、部隊など詳細は不明だが朝鮮にいたようだ。便りのやりとりも何度かしていた。年齢から、徴兵検査後現役入営していたのかもしれない。

戦後、英夫は二人の兄がいつ帰るか心待ちにしていたが、しばらく二人の消息はわからなかった。下の兄については、一足早く復員した戦友が、四五年一〇月二〇日に小黒家を訪問、朝鮮では飛行場勤務だったといい、近々帰るだろうと言いつ残していったが、その三日後朝早く七時前に、下の兄が突然帰ってきた。四日間食事も取らず、リュックサックにつめたお土産の品々、米・乾パン・砂糖などの食料品の他、煙草や薬品、外套に地下足袋などを持ち帰ってくれた。飛行場勤務だったため、操縦者向けの栄養豊富な航空糧食が含まれていて、翌日英夫も早速食べしてみた。「甘くて、とても、うまい」と

日記に感想を書いている。

一方、上の兄についてはまったく消息がわからなかった。四五年一〇月一日の日記には、「あ、フィリッピンの大きい兄さんよ。無事で故国に帰ってください。一日も早く、横浜へ、家では、大きくなった弘子が首を長くして待っている」と、兄のまだ見ぬ娘をはじめ皆で帰りを待ち望んでいる思いを祈るように書き記している。

しかし、その思いはかなわなかった。四七年一二月、上の兄辛一の戦死公報が届いたのである。戦死公報は、四五年四月二〇日、ルソン島クラーク地区山地で戦死したと伝え、年が明けて遺骨も届いた。フィリッピンの戦闘状況から実際の遺骨が届けられたかは疑問だが、ともかく四八年一月二〇日に葬式を行い、二五日には遺骨を墓に納めた(一月二二日・二五日付日記、および一二月三一日の回想による)。

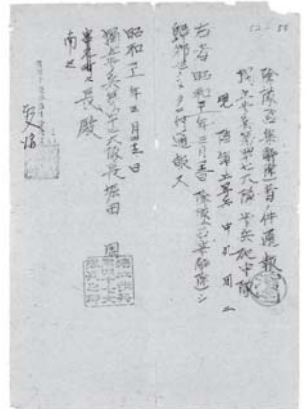
復員時には家族のためにわざわざ食料などをかついで帰った下の兄であったが、その後は定職に就くこともなく、ときおり進駐軍の日雇い作業に出ても家にお金を入れなくなり、少なくとも英夫が日記を書いていた五〇年までに順調な社会復帰は果たせなかった。二〇歳前の末弟英夫が、両親となんとか家計を支えたのである。働き手が戦死してしまっただけでなく、復員した兵士とその家族にとっても戦後の暮らしの再建は容易なものではなかったのである。(羽田博昭)

六月十日(水) (P. 10/10) 思ふより助かるとも。今日仕中のトは明日午前中まで定まる見だ。僕の豫定ではこのトを八時三十分まで勤務定。今迄の最高を今月は取るつもりだが今後の飛行が大切だ。正に油断大敵である。今日もお母さんが、兄の所を来れ及再會に行き来た。このトを本行せぬ。僕何時も思ふ事は五が非き運命の事だ。その兄を持ち、三男の猫の尾と生れ、工業學校迄来た。これ迄に至るまで、小黒兄の父官統、大兄の出生、今に至る、これが、家の不運の始りだ。鏡に戦災をうけた裸體になり、父、今、一万円ばかり預金もいらい、周買ひで、方分使ひ果し、小黒兄の復員後、父存、が、思ふより、働けるな。この頃、か、姉は弘子と共に何かと口実をばして、東京の姉の家へ手帳に行き、家の中に、姉は弘子と共に何かと口実を加ふる。小黒兄は、日邦の義理も手帳を、遂に今の住所に安定した。人間不運に落ちると、何處迄も判らぬ。十二月、とうとう、大黒兄の比島戦死の公報が来た。大黒兄を失った僕の心は、いかに淋しかったであらう。

中丸周二はその後、進駐軍の自動車工になったが、米軍に使われるのを嫌ってすぐに辞めた。そして、翌四七年三月に野毛のマッカーサー劇場に就職

復員兵の社会復帰

復員兵の社会復帰には、様々な困難が待ち構えていた。家族の思いも、伝わらず空回りすることもあった。一九二九年生まれの小黒英夫は、一九四五年春に中学校を卒業したばかりの一六歳だった。四月一日の空襲で南区井土ヶ谷上町の自宅は焼失、それまで付けていた日記も焼いてしまった。その後再び日記を書き始め、五〇年頃までの日記が残されている。日記には、出征していた二人の兄のことが度々書かれている。小黒英夫の日記は、横浜の空襲と戦災関連資料と複製があり、



除隊(召集解除)者ノ件通報
1946(昭和21)年3月22日
横浜の空襲と戦災関連資料

したが、これがつぶれてから仕事には苦労を重ねたらしい。しかし、中丸一家は周二の戦友同士のつながりにも助けられている。兄周二の奉公袋を持った妹は小机駅で、奉公袋に書かれた名前に気づいたある男に声をかけられた。それが、周二の戦友だったのである。その戦友は農家だったのだろう、その日芋などを持たせてくれた上に、その後も、ナスやキュウリなどを自転車でわざわざ届けてくれるなど、家族ぐるみの付き合いをしばらく続けたという。

復員兵の社会復帰

復員兵の社会復帰には、様々な困難が待ち構えていた。家族の思いも、伝わらず空回りすることもあった。一九二九年生まれの小黒英夫は、一九四五年春に中学校を卒業したばかりの一六歳だった。四月一日の空襲で南区井土ヶ谷上町の自宅は焼失、それまで付けていた日記も焼いてしまった。その後再び日記を書き始め、五〇年頃までの日記が残されている。日記には、出征していた二人の兄のことが度々書かれている。小黒英夫の日記は、横浜の空襲と戦災関連資料と複製があり、